

ポロンナルワは、アヌラーダブラ<sup>1)</sup>に続いて10世紀から12世紀までの間、スリランカの首都であった。アヌラーダブラもポロンナルワ<sup>2)</sup>も基本的には、同じような運命を辿っている。後者の灌漑設備は他の文明都市に比べて非常に進んでいた。又、ポロンナルワを統治した王は、仏教の普及に力を注ぎ、仏教都市として開発した。僧院が多く建立されるに従って、タイやビルマの仏教僧が都に訪れるようになった。仏教の普及に力を注ぎ、ポロンナルワを仏教都市として開発した。僧院が多く建立されるに従って、タイやビルマの仏教僧が都に訪れるようになった。再々、南インドのタミル人から侵略を受け、その後、ポロンナルワは廃墟と化した。ジャングルに埋もれていたのを、19世紀になって発見された。遺跡の発掘が始まり、最盛期の栄華を伝えるアジア有数の大遺跡群を観ることが出来、その昔の王朝史を物語っている。南北5kmの広域にわたる寺院・仏塔・宮殿等々、すばらしい仏教芸術のステージが点在する。世界各地から訪れる観光客は、その広大さに魅了されるという。

### 宮殿跡を歩いてみる

タミル人の襲撃・侵攻・奪還を繰り返したシンハラ王朝は、1017年に遷都を敢行した。北中部州東に位置するポロンナルワは、ドライゾーンで、前王朝時代から貯水事業が進み、生活の基盤となって豊

かな暮らしが出来た。中でもパラークラマ・バーフ1世<sup>3)</sup>の時は繁栄を極め、その宮殿跡を歩いてみることは興味津々であった。ガイドブックを読んで「百聞一見にしかず」と、10月の灼熱の太陽を浴びながら歩いた。スリランカの人々は、遺跡観光というよりも、信仰の場巡りをしているような印象を受けた。遺跡地入口から東へ突き当たると、右側にパラークラマ・バーフ1世の宮殿跡へ入り口がある。西側に位置する重厚なレンガ造り建築がある。この宮殿の高さは、その建築当時35mもある7階建てであったという。レンガ造りの厚さは3m位であろうか。ホールの屋根を支えていたのは36本の柱であったとも。区切られた部屋は50室で、その中に300人の女性が暮らしていた。日本では、さしずめ大奥であろうか。王妃や側室も同居するその環境は世界共通のようで、慣習のようになってしまえば、ごく普通に受け入れるものなのだと思う。壁に今も残っている開口部には、木造の床を支える柱がはめこまれていたのであろうか。床は階が上るにつれて狭くなり、ピラミット型の構造であった？レンガ造りの壁は、3階までしか残っていないのは、木造部分が朽ちてしまったのかと想像してみた。2階に続く石段は、一つしか残っていないが、しっかりとしていた。20年余前の人の姿はサリーやサロンスタイルであったのに、周りを見るとフレヤースカートやジーンズ姿の男性もいる。時代の変化を感じる。

建物の裏側を通っている水道管らしいものは汚水溜に連なっていた。異臭悪臭が遠のけられる工夫がされている。ということは、かなり高度な建築技術であったことが窺える。古の時代から、このような建築事業を推進出来たことは、パラークラマ・バーフ王の大功績である。国は王をリーダーとしてその力に判断力や理解力が加わることで発展する。また、王の権力はその統治力によって維持されるともいえよう。



ポロンナルワの宮殿跡 (「グーグルPanoramioより」)



ガル・ヴィハーラの涅槃仏  
(「グーグルPanoramioより」)

閣議場・沐浴場・・・象やライオンなどの彫刻と幾何学的デザインが精巧に刻み込まれ、どの動物たちも人間も生きている如く躍動感がある。世界遺産のピーアルポイント「磨崖仏寺院、ガル・ヴィハーラ」は、王の遺功を讃えているかのようで、今日でも参観者が絶えない。聖と俗、清濁を合わせ呑む偉大な器こそ、何よりも王の条件だと思えてきた。

### まがい 磨崖仏を観る

ポロンナルワの最盛期は海外貿易も盛んで、ヒンドゥ文化の影響も随所に見られる。スリランカ最大の磨崖仏寺院、ガル・ヴィハーラもその一つで、石造りの座像・立像・涅槃像が並んでいる。仏陀が理想を経て悟りを開き、涅槃に入る流れを表わしている。3体の仏像の前に立っていると、迫力があるというよりも、なだらかな姿態や表情から安寧を感じさせる。向かって左の方の仏像は、瞑想する様子で精神を集中しているようだ。印象深かったのは、その向かって右足の上方にみだりに包まれたライオンである。「どんな強い人でも死んでいくという例えを、ライオンにみる」とガイドが説明された。その横に、僧院窟に入った仏の座像があったが、この坐像はヒンドゥ教の神に囲まれていた。ヒンドゥ神が仏教を守っているように思える。仏陀立像は腕を組んだ高さ7m位あるようだ。珍しい姿勢であるけれど、瞑想中に菩提樹が影をつくってくれたのでその陰の中で祈ったという説がある。いずれにしても悟りを

得たお姿らしい。ご一緒下さったタランガッレ・ソーマシリ師は、「ブッダの弟子・アーナンダが悲しみにくれている立像だという説もあるよ」と云われ、私も仏陀の死を悼む弟子の気持が美しく彫られているように感じた。その隣が涅槃仏である。ふくよかで優しい表情をしている。15米ほどあるだろうか。涅槃仏であることの証拠に左右の足が揃っていない。これらの座像・立像・横状像は後方にある岩山を刻んで造り上げた石造群である。暑さを忘れてその気高さを拝していた。

パラークラマ・バーフ1世は、サンガ<sup>4)</sup>の浄化にとどまらず、上座部仏教の再布教にも取り組んでいる。自国の仏僧に対するビルマ側の扱いに抗議するために伝道師を派遣した。1181年には、ビルマに送られた僧侶がシンハラ・サンガを創設している。そのビルマから13世紀にはタイにも伝わっている。

仏教興隆の背景にはこうした強い決断力と実行力が常に起爆力となっている。他面・権力と仏教の関わりを考えると、王が国民をまとめるに当たって、仏教の戒律による統治方法が民衆の心をより一層深く掴む力になったのではないだろうか。王の信仰心の厚さが仏塔や寺院・磨崖仏などを建造すると共に民衆の心を掴んで離さないものとしたに相違ない。

### ■注

- 1) アヌラーダプラ：スリランカ北中部州にある古都である。北中部州の州都であり、アヌラーダプラ県の県都でもある。1982年、ユネスコの世界遺産に登録された。
- 2) ポロンナルワ：スリランカ北中部州にある中世の古都。1017～1255年までスリランカの首都であった。
- 3) パラークラマ・バーフ1世：シンハラ王朝の首都構築に大きく貢献した。その治世の間、ポロンナルワは交易と農業が栄え黄金時代を迎える。

(上記注はいずれももウィキペディアから抜粋)

- 4) サンガ：仏教の出家修行者及びその集団のこと。シンハラ・サンガはスリランカ僧の教団を指している。